

幕末長州藩における海事志向の伝播

—近代造船の先駆者・渡辺蒿蔵の人生から照射する—

発表者 大島商船高等専門学校 准教授
牛見 真 博

1 発表概要

私は、「幕末長州藩における海事志向の伝播」ということで、松下村塾塾生で造船の分野に進んだ渡辺蒿蔵について、研究しました。彼は、渡辺家の三男として生まれ、幼くして天野家の養子に入りました。復姓して渡辺蒿蔵を名乗るのは、明治7年になりますが、今日は、便宜上、渡辺蒿蔵と呼称します。

論文の構成ですが、松下村塾時代、吉田松陰の海事意識、長州藩内の海事及び英学志向をめぐって、海外留学に至る経緯、留学時代、長崎造船所時代となっています。

渡辺蒿蔵（天野清三郎）は、15歳で吉田松陰の松下村塾に入門し、志士としての活動を経た後、藩の海外留学生としてアメリカ・イギリスに渡り、造船を学びました。帰国後は工部省に入り、長崎造船所の所長として、当時、東洋一といわれていた、立神ドックの建設に尽力するなど、我が国における近代造船業の先駆けとなった人物です。

造船分野へ進んだ理由について、渡辺は次のように回想しています。

「私は高杉、久坂其他の人の様な働きは出来ぬ、愚痴であった。併し松陰先生が今後の日本は大いに造船、造艦の術を起して、航海遠略の基を立てねばならぬと話して居られた故、船大工なら私にも出来ようと思つて、慶応三年ロンドンに渡つた。これが船に関することに身を致すに至つた所以である」。

この回想からは、当時の長州藩内での藩政との関わりは見えません。本人は「船大工なら私にも出来ようと思つ」たと述べていますが、幕末の長州藩から海外に渡った人物は限られており、藩政との関わりから海外派遣の意義を認められ、渡辺蒿蔵も選ばれたに違いありません。

渡辺の研究史料としては、「渡辺翁を語る・渡辺翁追憶座談会速記録」という冊子があり、松下村塾の様子など貴重な証言も多いのですが、どうも渡辺自身が生前に余り自分のことは語らなかつたようで、肝心の渡辺の人生を追うには、非常に断片的な史料と言わざるを得ません。また、先行研究として、海原徹先生の『松下村塾の人びと』『松下村塾の明治維新』（いずれもミネルヴァ書房刊）があります。これらは大変な労作で、渡辺の人生を良く伝えているのですが、本の性格上、渡辺についての専論ではありませんので、前後関係や因果関係が掴みにくい部分があります。そうしたことから、今回、私は、渡辺蒿蔵の基礎的研究ということで、吉田松陰の門下から造船の分野に進んだ経緯に焦点をあてつつ、師である松陰をはじめとする幕末長州藩に色濃く存した海事志向に着目し、先行研究の空白を埋めていくことを意図しました。なお、ここでは「海事志向」を、幕末に盛んになった航海や操船技術をはじめ、日本を防禦するための造船、大

砲を含む海軍知識・技術の習得を目指すことと定義します。

論文2頁から5頁にかけて、松下村塾時代の渡辺を追っています。彼は15歳で松下村塾に入門しています。渡辺の80歳を過ぎてからの回想に、松下村塾では、志を立てること、また実行が何よりも大切であるということを読んだとあります。また、松陰の期待には大きいものがあつたようで、松陰は晩年に江戸の獄中から、高杉晋作に宛てて、彼のことを頼むという内容の書簡を送っています。渡辺は非常に見所があり、また非常に気に掛かる門下生の一人として松陰から認識されていたことがうかがえます。従来、松下村塾を描いた本の中には、渡辺は頭の働きの鈍くて、勉強嫌いなため船大工を目指した、といった描き方をされているものもあります。しかし、これは渡辺自身が自分のことをあまり語らず、語ったとしても、「自分は愚痴であつた」などと謙遜をする人だったので、本人の言葉をそのまま反映させた見解であり、事実とは異なるのではないかと思います。

渡辺は、今後の日本は造船に力を入れねばならぬという松陰の持論に影響を受けたと回想しています。その松陰の海事意識について見てまいります。

まず黒船来航前です。松陰は嘉永3年に長崎の葉山佐内のもとを訪れています。その頃の松陰の海事意識については、論文5頁をご覧ください。当時の松陰は、海軍の船はあまり大きいものを造らない方がいいと述べています。これは、船が小さいほど大砲の玉も避けやすく、造るのも早く、進退も容易で負けた時にも舟を隠しやすいためとしています。そして、最後は、皆剣をとって決戦すべきだと述べています。こうした吉田松陰の海事意識は当時の時代的な限界であつたのだらうと思います。翌年には、江戸で佐久間象山に入門し、本格的に洋学に目を開かされますが、欧米列強の脅威に強い危機感を覚えるのは、黒船を目の当たりにしてからのこととなります。嘉永6年に黒船が来航すると、松陰の海事意識は大きく変化します。論文6頁を御覧ください。例えば、それまで尊王攘夷の理論的支柱として傾倒していた水戸藩の会沢正史斎について、松陰は、尊王攘夷の理論だけでは何の役にも立たないのであり、会沢にこれからの我が国に必要な軍艦をどう作るのかと問うても、分かるはずもなく役に立たない、などとし、実学志向が強くなっていることがうかがえます。この辺りの柔軟さが、松陰の面白いところです。

また、海事教育の必要性についても述べ、大学校をつくって、航海学科を設置し、10代から20代の若者に海外への航海実習をさせるべきだと説いています。東京海洋大学の國枝教授によると、船員教育の観点からもこのことは大変理に適ったことであるということです。松陰は、そうした強い海事への関心を、当然松下村塾の塾生たちにも大いに語り、渡辺もそうした松陰の熱を、身近に感じ、感化されたであろうことは想像に難くありません。

次に、論文8頁の藩内における海事及び英学志向についてです。安政4年に長州藩初の洋式船「丙辰丸」が造られます。万延元年には、藩で最初の江戸遠洋航海が行われました。この丙辰丸の建造、江戸遠洋航海の実施には、桂小五郎が一役も二役も買っています。藩で初めてとなる江戸への航海は、楫取素彦の実兄である松島剛蔵が艦長をつとめ、高杉晋作と渡辺も乗り込んでいます。高杉はそれまで航海経験もなく、修行もしておりませんが、これからは海の男として生きると周囲に語り、江戸到着後は築地の軍艦

操練所で蒸気機関を学ぶことになっていました。高杉が同乗できたのは、おそらく本人のわがままとコネであったと考えられます。萩から江戸品川まで60日かけて航海しますが、高杉らしいと言うべきか高杉は、船に嫌気がさしたのか、江戸到着後に入るはずだった軍艦操練所での修業をやめて、剣術に生きるとして、剣術修業名目の遊学に切り替えています。

この航海の副産物というべきことこそが、渡辺蒿蔵でした。江戸航海の史料の中には、渡辺のことは全く出てきませんが、松陰から渡辺の後を託された高杉が、兄貴分として、渡辺をこの航海に参加させ、そして、この航海経験が、当時18歳だった渡辺に大きな影響を与えたものと思われます。

また、万延元年以降、長州藩から海外に行く人々が多く出てきます。皆、「航海術」をはじめとする「海軍修業」の名目です。その人物を改めて整理すると、長州ファイブの一人である山尾庸三は、4歳年上の桂と江戸の斎藤道場から旧知の間柄です。彼のロシア行きについては、郷里の近い大村益次郎も周旋に努めています。山尾は高杉、久坂らと志士としての活動を共にしており、海事志向についても松陰門下生たちと共有していたことがうかがえ、渡辺にとっては近い先輩格にあたります。山尾の他にも、藩で最初の蒸気船の船員となった井上馨と遠藤謹助、さらに長崎で学んだ井上勝等の人物は、すべて何らかの形でイギリス留学の前に、「航海」や「海軍」に関わっています。海事を学ぶことがこの時代を切り開く突破口であるという意識が、当時の長州藩には濃厚にあったことがうかがえます。渡辺にとっても、身近な先輩格の人々が海外に行ったことが、将来の自分の外国行きを意識する動機付けになるとともに、海事志向や外国への憧れを後押ししたものと思われます。

さらに、渡辺が幼少の頃から親しかった3歳年上の久坂の存在も大きなものがありました。久坂は、安政6年から藩の洋学の学校のリーダー的存在として、軍艦や大砲などについて学んでおり、その時期に、渡辺と久坂に頻繁に行き来があることが久坂の日記から分かります。その後、江戸に出た久坂は、松下村塾の門下生たちに、いま最も気に掛けるべき国はイギリスである旨の手紙を送っています。また、幕府の遣欧使節としてイギリスを訪れた杉徳輔も、高杉の父親へ宛てて、イギリスの強大さを指摘する手紙を送っています。こうしたことから、長州藩におけるイギリス重視の機運の高まりがうかがえます。少し視点を変えますと、このイギリス重視の選択が、後の近代国家形成、特に工業面で大きな意義を持ったことを踏まえれば、渡辺を含めた長州藩の海外情報の共有や活用の能力の高さが分かります。

安政の大獄により松陰が亡くなった後も4歳年上の高杉や3歳年上の久坂との深い関わりは続きます。文久3年に渡辺は「奇兵隊稽古掛」を拝命しますが、その後に京都に詰める久坂との関わりから、「勅使」の護衛係に替わり、長州と京都を行き来するようになります。しかし、翌年の禁門の変で久坂は亡くなり、また連合艦隊の報復攻撃で、長州藩の海軍の船は全て失われます。こうした藩内の状況を間近に体験した渡辺は、ここで、松陰が説いていた造船、海軍知識を学ぶことに自らの進路を定めたものと思われます。

渡辺は22歳の時、長州藩の洋学の拠点である「博習堂」に入所します。これは久坂も学んでいた西洋学所が、大村益次郎により、本格的な西洋兵学教育機関に発展してい

た時期のことです。渡辺はここで「英語」と「海事」を学んだ後に、大村の推薦で「博習堂」と合併した「三田尻海軍学校」へ進むことになります。

防府の三田尻海軍学校では、藩の軍事体制の中核リーダーである「艦隊長」、「艦長」などになる幹部候補を育成していました。これまでに長州藩初の江戸航海や奇兵隊の稽古掛を通じて、陸上・海上の実地経験を積み、さらに博習堂で英語も修業している渡辺のような人材は長州藩では非常に珍しく、その存在感は大きかったはずで、大村や木戸の目には、渡辺が長州藩海軍の幹部候補として映っていたことは想像に難くありません。実際、幕長戦争後の慶応3年には、海軍学校の教官を務めています。そして、木戸にイギリス行きの強い希望を伝え、木戸もまたそれに応えたいとしています。

木戸の後押しが大きかったと思いますが、慶応3年12月、渡辺はアメリカ・ボストンにわたり、そこからさらにイギリス・ロンドンにわたり、ロンドン大学ユニバーシティカレッジに入ります。それには、一足先に同校で造船を学んでいた長州ファイブの一人、山尾の存在も大きかったと思われます。山尾は「土木工学」という科目を履修していましたが、その内容は論文資料の18頁の表のとおりであったことが当時の大学要覧から分かっています。当時、造船は工業技術を集約したものと考えられ、山尾は造船を通して工業全般について習得したいと考えたようです。後に、グラスゴウの造船所で働き、帰国後は工部省の設立をはじめ、工業分野の人材育成に尽力しています。後に、帰国した渡辺を工部省に呼んだのも、山尾です。渡辺も、大学、造船所と山尾と同様の環境で修業に励んだものと思われます。しかし、明治5年に「学制」が公布されて留学制度が変更となり、渡辺を含めて、明治以前に海外に渡った留学生は、すべて召還されることになります。

帰国した渡辺は、長崎造船所に赴任することになります。当時、船舶機械製造所の確立が国家の最重要事業の一つに位置付けられた一方で、先端の知識、技術をもつ現場責任者がいないという状況でした。そのような中で、帰国し工部省に入省した渡辺は、立神ドックが着工するわずか10日前、長崎造船所の第二代所長として着任します。

その後、明治12年には立神ドックを完成させ、明治16年には当時我が国最大の木造汽船小菅丸を完成させました。しかし、当時の長崎造船所は、近代国家としての威信をかけた工場であり、渡辺自身も非常にこだわりぬく職人氣質なところが強く、そのため、過度な設備投資や原価管理体制の不備を生み、経営状態は悪化、さらに当時のデフレ政策による不況が重なり、明治17年には郵便汽船三菱会社（後の三菱重工長崎造船所）に貸与されることになります。

その後も、渡辺は、港湾・船舶に関わる仕事に携わっていますが、自他ともに認める造船技師である渡辺にとって、その仕事は必ずしもその意に沿うものではなかったのかもしれない。明治24年、49歳で萩に帰郷し、その後は同志の遺品や松下村塾の保存などに尽力しながら、松陰門下生最後の生き残りとして、昭和14年、97歳で亡くなります。

今回、関係資料によって改めて渡辺蒿蔵について追ってきましたが、このように見えてくると、彼の人生は、まさに師である吉田松陰をはじめ、久坂や高杉といった先輩同志、新政府のリーダーとなった木戸、松島、大村といった長州藩西洋学の重鎮、ロンドン留学の先輩山尾等の人のつながりに導かれ、まさに歩むべくして歩んだ人生であったと

思います。そして、重工業政策の重要な一端を担った長崎造船所、ひいては近代日本にとっても、渡辺蒿蔵は、まさに天の配剤とも言うべき人物であり、幕末の長州における海事志向という、先人の志・行動力の伝播が、まさにこの人物に実を結んだと言えるのではないかと考えております。

2 質疑応答

(質問)

周囲の人物等に影響を受けながら人生が形作られていくということを渡辺蒿蔵の人生から感じたというところなのですが、牛見さんが特に渡辺蒿蔵に着目された理由、きっかけというものはどのようなものがあったか教えていただければと思います。

(回答)

私を含め人は、本当に偶然に置かれた状況や学校・職場等での人との出会いによって、人生が作られていくと非常に強く感じています。そのことを歴史の中で体現しているのが渡辺蒿蔵だと感じ、そういう点に着目し、研究しました。その結果、興味を持って研究を進めていくことができました。

(質問)

長崎造船所が民間に貸与された時に、渡辺が工部省の他部署に出仕したということが書いてあります。造船は当時の明治国家にとっても重要なことだと思うのですが、なぜ造船技師として自負していた渡辺が、その後に造船技師として働けなかったのでしょうか。また、なぜ横須賀造船所等のいわゆる官営の造船所でも働けなかったのでしょうか。

(回答)

渡辺と三菱の岩崎弥太郎との関係ははっきりと分からないのですが、ある文献では、渡辺が岩崎のもとで働くのを好まなかったということがうかがえる記述があります。

また、官営の造船所については、なかなかお答えが難しいですが、留学中、日本には木が多いから木造船を学んだ方がいいんじゃないかという助言があり、渡辺は、イギリスの後にアメリカにもう一回渡り、木造船について学んでいます。これはもう想像の域をでませんが、木造船の時代が終わり、鉄船に移行していく中で、明治20年代以降、渡辺が造船技師として活躍する場が無くなってきたのではないかということも考えられますし、49歳で突如萩に帰ってしまいますが、職人氣質な一面も影響していたのではないかと、色んな文献を読んでいく中で感じております。